

キリスト教委員会のHP(<http://rakuno-ce.org>)にアクセスして事前に聖書や讃美歌の確認をしましょう。

ここに示されている意味内容を探ることも肝要だからです。それはさしずめ桃太郎や浦島太郎といった昔話から、物語が指し示そうとする意味や教訓を自ずと読み取っていくことと同じことだと申せます。

本日の聖書テキストはイエスが洗礼を受ける物語です。歴史的に確定できるのは、イエスがヨルダン川でヨハネから洗礼を受けたということだけです。ですから、歴史学的には「天が裂ける」「聖霊が鳩のように降る」「天から声がする」といった描写はイエスの洗礼を荘厳にするための神話的な演出だと結論づけられます。これらの神話的表象は現代の科学的知見からはナンセンスとして一笑に付されてしまうものかもしれませんが、この物語を日本の昔話のように読解することを試みれば、一見ナンセンスに思えることにも、そこに込められた意味を感じ得できると思えるのです。

イエスの洗礼物語は旧約聖書の諸物語を背景として描かれており、創世記6-10章の洪水物語(ノアの箱舟)もそのひとつです。「天が裂ける」「聖霊が鳩のように降る」「天から声がする」といった描写は洪水物語を彷彿とさせます。これらの描写は新たな時代の幕開けを示す神話的表象であり、マルコ福音書はイエスによって新たな時代が開始され、「神と人」や「人と人」の間の断絶に終止符が打たれることを示しています。イエスの洗礼はそのような断絶の終焉を示す象徴的行為としての役割を担っています。つまり、「神と人」や「人と人」との間の断絶や不和を解消するには、洗礼に象徴される自分自身の罪を悔い改めること、つまり何よりもまず自分自身の問題を省察することが大切だということを示しているのです。これはわたしたちの身近な生活から国際社会までも覆う人間の在り方の根本に関わる問題です。断絶や不和を解消するには、他人任せではなく、自らの在り方を省み、自ら相手に歩み寄ることから始めるしかないのです。

【2019年度の感謝】

2019年度も学内外の多くの方々に大学礼拝にご協力いただき、本日無事に最終礼拝を迎えることができました。讃美指導の相原晴伴先生、奏楽の佐藤理恵先生、聖歌隊のみなさん、学務課のスタッフ、入試広報センターのスタッフ、キリスト教委員会の諸先生とスタッフのみなさん、そして学生と教職員の方々に心より感謝申し上げます。2020年度も大学礼拝に対するお支えとお覚えを賜りますようお願い申し上げます。

【次回の大学礼拝】2020年4月14日(火)10時40分

次回の大学礼拝は2020年第1回目の礼拝となります。奨励の担当は小林昭博先生の予定です。2年生以降も時間を作ってぜひご出席ください。

【前回の大学礼拝】2020年1月7日(火)

学生：192名 教職員ほか：28名 合計：220名

【大学礼拝週報】 2019年度 第30号 (後学期第15号)

2020年1月21日(火) 午前10時40分

酪農学園大学 黒澤記念講堂

《大学礼拝》

司 式 小林昭博(宗教主任)
奏 楽 佐藤理恵(野幌教会会員)
讃美指導 相原晴伴(循環農学類教員)

前 奏 「いざ喜べキリストのともがらよ」(J. C. バッハ作曲)
讃美歌 讃美歌第二編 167番(われをもすくいし)
聖 書 マルコによる福音書1章9-11節
祈 り
さんび 酪農学園大学聖歌隊
奨 励 「まず自らを——イエスの洗礼」 小林昭博(宗教主任)
讃美歌 酪農讃歌
報 告
後 奏 「強き王なる主をほめまつれ」(ツイップ作曲)

【本日の聖書】マルコによる福音書1章9-11節

9 そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。10 水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。11 すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

【本日の奨励】

イエスの公生涯は共観福音書では1年間、ヨハネ福音書では3年間と異なっており、ルカ3:23が伝えるところによると、イエスが公の活動(宣教活動)を始めたのは30歳とのことです。この記述が正しいとすれば、わたしたちはイエスの30年強と予想される生涯の1年~3年程度を断片的に知っているに過ぎません。ですから、わたしたちが歴史的にイエスに接近する場合には、福音書を中心とするイエスに関する資料を手がかりとして、イエスの実像に迫っていく必要があるのですが、単にイエスに歴史的に接近してみたとしても、その実像に簡単に肉薄できるものではありません。そもそも、福音書は現代世界とは異なる文化的価値観のなかで描かれていますので、単に史実であるかどうかを見定めること以上に、そ